

# ‘impromptu’な話す活動の実践に向けて

工藤 洋路

(駒沢女子大学)

## 1. impromptu speech の難しさ

「国際学会に参加した日本人研究者が、研究発表は英語で行うことができたが、その後の質疑応答でうまくいかなかった」とか「スピーチコンテストの優勝者に受賞後のインタビューを英語で行ったら、答えられなかった」という話を時おり耳にすることがある。これは、準備した英語は伝達できるが、即興で話すことは難しいということを示している。

2005年に中学校3年生を対象に実施された「特定の課題に関する調査(英語:『話すこと』)」の結果によると、「テーマが与えられて30秒間考えた後に1分間で自由に話す問題」において、誤答と分類された約7割の解答の多くは、約15~20秒で話が終わっていた。つまり、準備したものを話し終えた後は、その場で考えながら話すということがほとんどできなかったということである。言い換えると、準備したものを英語で話すこと(prepared speech)はできるが、その場で即興で話すこと(impromptu speech)は、やはり難しいということである。

では、なぜ即興で話すことは難しいのであろうか。英語で話すためのプロセスを考えてみると、通常のコミュニケーションでは、まず「言いたいこと」が存在している。それがすでに言語の形式になっている場合もあれば、抽象的なアイデアの段階であったり、感情や欲求という心理状態の段階の場合もある。いずれにせよ、「言いたいこと(WHAT)」がない限り、話す行為は始まらないため、話すためには、その内容を作り上げなくてはならない。英語の授業やテストでの話すべき内容は、普段生徒が考えているものである場合が多いが、たとえ身近な話題であっても、それを英語で話すために、簡単な日本語

に置き換えたり、要点だけに内容を絞るなど、何らかの加工を行うことになる。この加工作業が話すための第1ステージとなる。次の段階では、その加工された内容(WHAT)を「英語でどう言うか(HOW)」の処理へ進む。このステージには大いに文法力と表現力が関わってくる。挨拶などの定型表現や暗記した文がそのまま使える場合は、この処理は瞬時に行われるが、先に紹介した「話すこと」の調査問題のように、一定量以上の英語を話すことが求められる場合には、定型文や暗記された文だけで済ませることはできないため、処理に時間がかかることになる。この2段階のプロセスを、瞬時にそして正確に辿ることができればimpromptu speechが可能になるが、やはりすぐにはこの処理能力を身につけることは難しい。したがって、このプロセスを分解して練習するという基礎段階から始める必要があるだろう。

## 2. impromptu speech の基礎活動

即興で話す活動の基礎段階として、WHATとHOWのいずれかの段階だけにフォーカスしたトレーニングの例を考えてみる。プロセス・ライティングのスピーキング版として、まずはWHATに関わる1段階目のアイデア・ジェネレーションを、口頭で素早く行う練習を取り上げてみる。内容はバラバラであってもかまわないという条件の下、与えられた「お題」について思いつくことを日本語で話すというものである。お題が「好きな季節」であれば、「夏→海→泳ぐ→楽しい→日焼け→スイカ割り…」のように、アイデアを出させる。慣れてくると、このような語句レベルのアイデアであれば部分的に英語で行うことも可能になる。ただし、英語

に置き換えるのは次のステージであるので、ここは即興で瞬時に行くことを心がける。次のHOWの段階に特化したトレーニング例を見してみる。HOWの処理にフォーカスを絞るために、WHATの部分で教師や教材の側で準備することが必要となる。例えば、内容が一目で分かる4コマ漫画を与えて、それを英語で説明させたり、1段階目の例として上で紹介した語句レベルのアイディアを英語の文の形式にしてみる活動などが考えられる。大切なのはライティングではないため、原稿を書かせずに、イラストや語句を見てすぐに英文を作らせる練習をさせるということである。慣れるまでは、主語だけは教師の方で与えてあげるなど、英文を作るためのヒントを口頭で提示することも必要である。

### 3. impromptu な話す活動の例

与えられたトピックについて自由に1分間ペアで話すという自由度が高い活動がうまく成り立たない場合は、自由度が低い活動を積み上げていくとよい。活動のバリエーションを以下に提示する。

#### (1) モデルの提示

モデル提示は、WHATやHOWの一部分についてのヒントを提示する目的で行う。例えば、NEW CROWN Book 3のp.87「USE Speak チャットを楽しもう」のWhat did you do last weekend?という題で話させる場合、「I went to ... → I played ... → It was a lot of fun.」というモデルを提示すれば、「どこに行った→何をした→どうだった」といったWHATの大枠を提示することができる。同時に、I went to ...などのHOWに関わる材料も提示できる。ただし、ここまでヒントを与えてしまうとprepared speechに近くなるので、徐々に自由度を高くして、例えば、「場所→行動→感想」といったWHATの大枠だけを提示すれば、HOWの部分での言語材料の選択はその場で瞬時に行くことになり、impromptuな活動へより近くなる。

#### (2) 活動形態

理想的なimpromptuな活動の形態は、生徒同士のペアやグループで準備なしで一定の時間話し続けることであるが、その事前の活動段階として、ペアの形態であれば、1人が言うべき質問を手元にメモ

として持っておくなど、話す方の生徒がネタ切れにならないような仕組みを作るとよい。例えば、NEW CROWN Book 3のp.69 Practice 2 Speakに即興で話す要素を加えるとした場合、次のような2セットの追加質問リストを用意するとよい。

A1	How many times did you see that movie?
A2	Why did you choose (to see) that movie?
A3	What happened in the movie?
B1	When did you see that movie?
B2	Do you want to see that movie again? Why?
B3	What happened in the movie?

質問に答える側は事前に質問を見ないようにするために、AとBの2セットを切り離して、各生徒は質問をする方のセットのみ持つようにする。各1～3は難易度順になっており、1は語句、2は1文、3は2文以上で答える質問となっている。

#### (3) prepared speechからimpromptu speechへ

「お題」が与えられたら瞬時に話し始めるという活動以外に、prepared speechの後に、その場での質問に答えるといった活動も可能である。NEW CROWN Book 2のp.61のスピーチ活動（「私の夢」）では、例えば、You said you swim every day. How many hours do you swim?のように、話し手の言った内容をYou saidの後で繰り返して、それに関する質問を加えるといった形式でQ&Aができる。話す側だけでなく、聞く側の意識を高めることにより、impromptu speechのための環境作りが可能となる。

### 4. まとめ

「考えてから話す」から「考えながら話す」ためには、上記のような基礎的活動や活動のバリエーションを指導技術として持っておくことが大切である。加えて、その前提として、教師と生徒のやり取りの中で、What's the weather today?のようなdisplay questionだけではなく、What did you do yesterday?のようなreferential questionを用いることで、その場での意味のある内容のやり取り（聞き手側が答えを事前に知らないやり取り）が行われることが「普通」である教室環境作りをしていくことが必要である。